

許可せられざりしかば歸國の際其の趣を淺野家年寄役に申し年寄役を通じて宗家に伺ひしに其の希望遂に成就したりきといふ、尙其の時の柯子は庄太郎、勘次、和平次と横濱の五平太の四人なり。後年山村屋彦右衛門が對州藩より優遇を受けし文書を左に示す。

藝州漁船々頭 彦 右 衛 門

右者町人龜屋喜兵衛（嚴原の町人也）曳下にて去る丁丑年（文化十四年）漁事として初めて御國へ罷下候處漁場宜趣をも歸國の上申廣め追々漁船誘來り夫より段々漁船の來來年に相増專漁事せしめ居候然處右漁事之仕形外之漁船と違主向宜彦右衛門罷渡候以來漁事道具出來方等相教或は見習今程總而右之形に仕覺依而以前と違鯛釣揚方も相増候事と相聞隨而は御運上銀（税金）等も年々相嵩御國益も不<sub>レ</sub>少素其身世業筋とは申ながら彦右衛門入來彼是懸々心配をもちたし候故之儀と相見最早及老年候ものと相聞候付右之次第及沙汰不容易ながら以來入來之節々其身一生御運上差免候此旨夫々可被申付候 以上

壬午（文政五年）十二月二十二日

平 田 帶 刀（宗家家老）

年 寄 中

船 改 頭 役 中

御勘定奉行所 可被得其意候

右により山村屋彦右衛門其の人の功績は本村に對してのみならず、對馬土民の指導となり、海産物

の増加となり、ひいて藩の税金収入をも増して御國益も少からずと藩より褒めらるゝなど光榮の至なり、尙其の際重箱一重杯及杯臺等を賜はりたりと（實況調査及林勇三郎氏古文書）  
村内各浦に漁業組合はあれど特に發達進歩せるは大河漁業組合なり、依て煩を厭はず詳記して參考に資せん。

### 大河漁業組合狀況一覽

#### 一、組合の概況

(イ) 設立年月日 明治三十五年十二月十八日

(ロ) 位 置 安藝郡仁保村字新築地乙百八番地ノ三

(ハ) 地 區 安藝郡仁保村字大河及金輪島（高手の區域を除く）の區域

(ニ) 組合員數 二百九十四名（海苔養殖業三七七名、漁業一七名、海苔養殖業中漁業兼業者一四五名）

(ホ) 積 立 金 壹萬貳千四百九圓八拾壹錢（基金三、三三三圓。遭難救恤資金二一六圓。共同施設事業資金八、八六〇圓八一錢）

(ヘ) 不 動 産 (一) 宅 地 七百八十六坪三合四勺

(二) 山 林 六畝十三歩

(二)溜井敷 三步

(ト)建築物 六十坪七合五勺

(チ)什器 總點數 百二十點

(リ)漁業權 (一)區劃漁業權 八件

(二)特別漁業權 八十三件

(イ)鯧網の部 五十四件(内三十一件本組合代表)

(ロ)鯛網の部 二十九件(内五件本組合代表)

(三)地先専用漁業權 二件(内一件入漁權)

(四)慣行専用漁業權 一件(契約に依り入漁)

(ヌ)經費 昭和三年度豫算貳萬七千四百七拾圓八拾九錢(經常費五、九二四圓八三錢。特別會計二一、五四六圓〇六錢)

(ル)組合の機關 理事四名(内一名組合長)監事二名、總代二十六名

(ヲ)組合員の漁業狀態 海苔養殖及製造業を主體とせる組合にして之れが專業者二二二名漁業を專業とするもの一七名にして他の一四五名は漁業兼海苔養殖業とす。

主なる生産物は海苔にして年々豊凶ありと雖も年産額概ね六百萬枚乃至一千萬枚價格拾參萬圓乃至貳拾萬圓にして平年作拾六七萬圓の生産あり其他主たる漁獲物

獲物鯧、鯛、鯖、チヌ、蟹、ボラ、鰈、海風等にして其の漁獲高四五萬圓を算す

(ワ)組合員の漁業種類別狀況

海苔築建養殖業 三七七人

牡蠣築建養殖業 四人

鯛地漕網漁業 一人

鯛船曳網漁業 三人

鰻地曳網漁業 一人

八重築漁業 四人 (内三人海苔築建養殖業兼業)

鯖建網漁業 二人 (内十人海苔築建養殖業兼業)

建網漁業 一人 (内十人海苔築建養殖業兼業)

桁網漁業 一人 (内十人海苔築建養殖業兼業)

撒餌釣漁業 三五人 (内二十八人海苔築建養殖業兼業)

二、組合の施設事業

組合事業經營の跡を顧るに組合員の心理を統一することは最も緊急なることなるに拘はらず本組合は設立當時より海苔養殖業者と漁業者とが其の業態を異にする關係上動もすれば圓滿を缺き組合事

業施行上遺憾の點ありしが漁業法發布以來縣當局の旋斡宜しきと組合員の自覺とに依り明治四十五年に至り漸く兩者間の融和なり組合員の心理を統一することを得たり。この間に本組合で組合基礎の確立を期するには基金及資金の蓄積をなし財政的基礎を作る方法を講ずることの急務なるを認め銳意之が蓄積に努めたる結果漸く積立金壹萬貳千四百餘圓に達するに至れり。

(1) 海苔製造の改善並製品検査

本組合に於ける主要生産物たる漉海苔の製造法を改良し優良なる製品の生産に努め販路の擴張を圖り以て組合員の福利増進を企圖することは本組合經營上最も重要事項たらざるべからざることに着眼し大正三年組合規約を改正し製品検査並販路擴張に關する施設を實施するの端を開けり、然るに大正七年に至り縣下海苔生産地に於ける代表者も廣島海苔の改良を圖る目的を以て再三會合し協議をなせし結果廣島縣海苔業組合の設立を見るに至りたるを以て爾來同組合と連絡を執り又は縣及郡技術員の指導を受け専ら製造法の改善に力を注ぎ大正十一年度よりは製品検査を徹底的に勵行し來りし結果製品改善の跡顯著にして本組合の製品は廣島海苔の代表的優良品として好評を博するに至れり。

而して最近五ヶ年間の製品検査數量は左表の如し。

事 項	大正十二年度	大正十三年度	大正十四年度	昭和元年度	昭和二年度
検査數量	五、八六〇、〇〇〇枚	六、三三三、〇〇〇枚	八、一〇六、〇〇〇枚	九、三三三、〇〇〇枚	六、九七一、〇〇〇枚

(ロ) 資金貸付事業

組合員の海苔養殖及製造、漁船、漁具の新調、撒餌釣漁業者の餌代に要する資金を低利に融通するの目的を以て大正十五年度より開始せるものにして貸付方法は一口百圓、期間は一ヶ年を限度とし組合員一名の連滞保證若くは適當なる擔保を提供せしめ日步貳錢五厘以内の利子にて貸付す大正十五年度の取扱件數五十五件、貸付金額五千參百參拾圓、昭和二年度の取扱件數七十六件、貸付金額七千五百五拾圓にして回收成績は頗る良好なり。

(ハ) 獎勵事業

漉海苔製造法の改良を助成する爲め製造の際生海苔を洗滌する洗ひ場の改善修築及製品に土砂及塵埃の混入を少からしむる改良漉盤の使用を獎勵し之に獎勵金を交付し又漉海苔品評會を開催せること既に五回に及べり。

本事業開始以來の獎勵金交付額は左の如し。

事 項	大正十三年度	大正十四年度	昭和元年度	昭和二年度
獎勵金交付額	三八〇圓	三一八圓	一一〇圓	三八圓

(ニ) 海苔貯藏庫及販賣所設置

從來完全なる漉海苔貯藏設備のなかりしと一面には組合員が製品販賣代金の取得を急ぎし爲め相場如何に拘らず製品は各潮毎に全部を販賣する狀況にして其の間には奸商の悪手段に弄せられ

組合員の蒙る損害莫大なるものあるに鑑み之が救済を圖る目的を以て本設備の設置を計畫し大正十五度に農林省より千八百圓の奨励金の交付を受け六千六百拾九圓貳拾錢の工費を投じて海苔貯藏庫及販賣所を新築し製品火入の設備として漉海苔電熱乾燥機の設備を完成し昨年組合員の希望に依り漉海苔火入作業を實施しつゝあるに其の成績頗る良好なり。

### 家禽其他

(昭和三年)

飼育戸數	飼育數量	生産額	價格
蠶	一〇五三	六九三〇	四三・六〇〇
鶏	四七〇	四一六一八五	一五・八一五
産(牛)	二二	二二	三〇〇
禽	二七	一一二	三・五〇〇

### 金融機關

(昭和三年末)

部	落	銀行	支店	金穀	貸付	業
向	洋					業
淵	崎					業
本	浦					業

### 産業の變遷興廢

#### 魚 簗

仁保島の沖より江波島にかけて西斥内斥とて二斥あり、西斥は廣四十五町袤十八町、内斥は廣六町袤十四町、河水北より流れ海潮南より來る、のは仁保島を去る數十町竹を枝ながら挿し處々空隙を設け潮の退くことに繩を空所にうけて魚の流れ出るを捕る、大魚は簗の内に留りて獲れざれどもそれは稀なり、潮の來去に隨ひ日夜魚を得る甚多し、土人之を八重簗といふ、按に日本紀天武天皇の詔に四月朔以後九月三十日以前莫<sub>レ</sub>置<sub>レ</sub>比滿沙伎理梁<sub>ニ</sub>とあり、比滿を釋日本紀には比滿に作り大日本史には比彌に作る、是れひとの事と見えたり、西行山家集、讚岐美濃津にてよめる歌に

しきわたす月の氷を疑ひて

ひとの手まはるあちの村鳥

是も亦ひとの事なるべければ、ひとの名も亦古し、漢名を按るに簗、簗、この三のもの其製粗同じく皆竹を海篋にさして魚蟹を捕るものと見え西陽雜俎に錢塘有<sub>レ</sub>人、年取<sub>レ</sub>魚億計、號<sub>二</sub>萬匠簗<sub>一</sub>、陸游

が詩に別浦潮回魚窟密、張意が詩に葦箔竹籐收團尖、此類にて見るべし、八重簾は萬匠篋の類なり、故に今收の字を用ふ。

次に牡蠣、海苔の事あれども各々其條下へ摘録したれば此所には略せり。

## 蠣 灰

蠣房カキガラを焼て灰とす、其用石灰に亞ぐ、海田市、仁保島、矢賀村に灰戸あり、又房にて大阪へ積登せ賣も多し。

## 鯛

鯛網の業諸村にあり、網の幅三十尋、長六十尋是をみと網といふ、網は皆麻糸にて製す、吳町及諸所に之を作る、其次に大廻大さ五六寸長三百尋なるをつく、みと網には桐木長一尺餘幅五寸許りなるウケ泛子を數多つく、之をあばとよぶ、おびき網には一斗許り容るべき樽の口なきを左右に二十四五も附けて泛子とす、其下に拳のごとき石を數多つけて墜子となす、其網を下さんとする時、先づ網を二艘の船に積み、一艘に漁父各七人を載す、且、此業によき者を浦君ととなへ、小艇にのせ別に小艇二艘二三人づゝ乗じて浦君に従ひ、海上を見廻り其指揮を待つて網を下し、左右より力を戮せて渦に曳上る、仁保島、似島、金輪島など常に曳場とす、多く沙上に晒してホシカ枯鯛とし、遠方に賣る、又なまにて近

市にひさぐも亦少からず、延喜式租調に比志古鯛ヒシコ見えたり、古より此國の産物たりと見ゆ。(以上通史)

## 灘 木 綿

藩政初期の頃より廣島附近は新開地續々築造せられ、これに綿作をなし、勤勉なる婦女子の織手によりて製綿紡織盛に行はれ白木綿の産地となれり、當時男子は内海に將た遠洋に出漁する者多く留守居の婦女子の内職として家庭工業として最も適當したれば灘木綿として廣島へ移出したるが品質優良の評高く歓迎せられたり、明治二十年頃迄繼續せしが廉價なる綿花の輸入と機械工業の發達、所謂産業革命の襲來の爲めに壓倒せられて廢絶するに至れり。

## 陶 器 製 造 業

慶應年間淵崎村木新次郎、渡邊榮次郎及廣島平岡屋某等共同にて伊豫より技術工を聘し淵崎字皿山に於て製陶業を創めたるが發展を見るに至らず凡そ十年位にして廢絶せり。

## 養 蠶 業 の 勃 興

明治十八年春蠶期より同十九、二十の三ヶ年に亘り、特に新築せられたる淵崎大町の養蠶場にて養蠶及製絲の講習會を開催せらる、講師は仙臺の人安永總兵衛(後には廣島より由良指導員代る)講習

生として郡内より青年處女二十餘名選出せられ、地方罕に觀るの施設たり、是より先數年以來桑の栽培流行し思惑熟など加はりて一芽幾圓てふ驚くべき高價なりし品種が幾厘錢に暴落するなど喜悲劇も演ぜられたり、是に於て其筋は産業振興を企圖し安藝郡に於て養蠶場建設講師招聘等の諸費を負擔し安藝郡興産社をして事に當らしめたり、講習生の中本村出身者は本浦金井勇次郎、淵崎保田松次郎、向洋大澤卯之吉、丹那谷口某、須崎某女、日宇那山根初之亟などなり、而して興産社長は野島柳次郎也、是より養蠶業村内を風靡したるが飼育消毒其他研究に缺ぐる所ありしか成績擧らず幾年ならずして衰へ日露戰役頃には全く廢絶したるも、近年に至り甦生し當局の指導と奨勵とにより漸次擡頭して再び勃興の氣運を示すに至りしは喜ぶべき事なり。

### 麥稈眞田業

明治二十二年頃澤田七衛門夏帽子の原料として麥稈眞田製造を試みたるが隆盛に至らずして終れり然るに同二十七年春凛然風來したるが備中の三宅民藏なり、原料麥稈を彼地より移入し工賃廉なる此地の女工を使用し盛に製造して海外に輸出せしより勃然として盛大を來し、續いて彼地より二十九年五月牧尾喜平、三十年五月黒川卯三郎等來り、此地の人々も續々開業するに至りしかば向洋の眞田業は一時本縣下中心集散地となり、大正の初年には一ヶ年の生産高五十萬反を越ゆるに至りしが米國の需用減退せし爲め次第に衰運に向ひ歐亂の際暫し好況を呈したるも後又萎靡不振に陥り、今日僅に餘

喘を保つのみに至る。

### 製鹽業

養生風呂潮濱館の記事中に大要を記したれば略す。

### 石鹼工場

明治二十八年先代中川半左衛門創業、漸次隆昌に向ひ販路も頗る擴張して京阪を初め四國九州より支那に及び、従業員三十五六名、年産額六萬圓に達したるが歐亂の終期營業主死歿のため大正七年廢業するに至れるは惜むべし。

### 可部銀行仁保支店

澤田七三郎幹旋により、明治四十一年一月仁保島支店として向洋に開業し、同地唯一の金融機關として隆たりしが、本銀行が藝備銀行に合併せらるゝに逮び昭和三年十二月末日限り廢絶するに至れり。

### 向堀信用組合

他町村に於ては産業組合は盛に設立せられて、其の優秀なる性能を發揮して共存共榮の福祉を増進